石炭産業研究における作文資料の可能性と課題
――炭鉱での生活、事故、閉山に関する小中学生の作文を事例に――

笠　原　良　太

Challenges of Analyzing Children's Essays in the Study of Mining Accidents and Closures

Ryota KASAHARA

Abstract

During the 1950s, it was common practice for miners' children in Japan to write school essays about their experiences in mining communities and their daily lives, especially when serious accidents and mine closures occurred. However, these essays have not been analyzed rigorously as research data that record and reflect the children's subjective emotions. This paper aims to explore three challenges of studying these essays. The first challenge is to illustrate how these essays can contribute to the field of life course studies. These essays on coal mine accidents and closures are valuable in exploring how children experienced these events. Especially as they were written by junior high school adolescents at a very sensitive period in their lives, the essays enable us to understand how they attempted to adapt to these events. The second challenge is to study these essays as a historical record of coal mining communities. Elementary school students in particular, in contrast to adults, having no social regard for how their words would be interpreted by others, wrote candidly about their families' daily lives and experiences. The final challenge is to justify this kind of study as a valuable contribution to qualitative research methodology. For example, as part of the research process essays are returned to the writers after many years, and this can help facilitate reminiscences of important life course events. Of course these challenges can only be realized when these essays are preserved as valuable archives for the future.

1．問題の所在

本論の目的は、国内産炭地の小中学生（以下、炭鉱の子どもたち）が書いた作文の資料的価値と課題を明らかにすることである。周知のとおり、国内の石炭産業は、およそ半世紀をかけて収束した産業であり、その過程で多くの炭鉱労働者とその家族が地域移動・社会移動を経験した。そのような産業構造の転換を子どもたちの視点から描いた資料として、炭鉱の子どもたちの作文がある。炭鉱の子どもたちは、石炭産業の好況期から衰退期にかけて、さまざまなテーマで作文を執筆し、それらの多くが今日においても保存されている。

しかし、作文資料は、これまで社会学の領域でほとんど注目されてこなかった。それは、作文資料がいくつかの制約を有しているからであるが、一方で作文資料は、多くの資料的価値を有している。筆者は、主に産業構造の転換を経験した子どもたちが、それにいかに適応したかという問題関心に基づいて研究を進めているが、炭鉱の子どもたちの作文は、そうしたライフコース研究における問いを解明するだけでなく、他領域の問いを解明する可能性を有した資料でもある。

本論では、こうした炭鉱の子どもたちの作文が有する可能性を明らかにするために、まず、先行研究における作文資料の位置づけを確認し（第 2 節）、実際に炭鉱の子どもたちの作文を引用しながら、ライフコース研究における可能性をみていく（第 3

節)。そして、地域史再編（第 4 節）および質的調査の方法論に関する可能性と制約を指摘し（第 5 節)、本論の知見をまとめたうえで作文アーカイビングの現状と課題を述べる（第 6 節)。

2. 作文を分析した先行研究

まず、本節では、炭鉱の子どもたちの作文に限らず、子どもたちの作文を分析した先行研究を概観し、これまで明らかにされてきた作文資料の価値を確認する。

（1）教育学における先行研究

これまで、子どもたちが書いた作文は、主に教育学の領域で分析されてきた。ただし、その蓄積は、教育方法論など一部の領域に限定され[1]、子どもたちがいかに社会のなかで生きているかといった社会学的関心に答えるものは少ない。ここでは、本論の関心に近い領域の研究をいくつか概観する。

自己認識の発達に焦点を当てた守屋慶子・森万岐子・平崎慶明・坂上典子（1972）は、質問紙法の包括性と回顧的制約を指摘し、作文分析の有用性を主張・実践した。対象は小学生 11 名と少数であったが、同一児童を 1 年生から 5 年生にかけて追跡的に分析し、自己認識のプロセス（他者批判から自己評価・批判、他者評価、そして、他者と自己の認識を過去から現在へ、個人から集団へと拡げること）を解明した。この知見に依拠しつつ、山本真子・小松孝至（2016）は、小学 4 年生の日記を分析し、対読者（特に担任の教員）意識や子どもたちが持つ日記執筆に対する評価が、日記の表記に影響すると指摘した。このように、子どもたちの作文は、子どもたちの自己・他者認識を把握するうえで有用な資料である。

また、教育方法論や教育心理学の先行研究では、特定の歴史的出来事をテーマにした作文を分析している。たとえば、生活綴方教育の意義と問題の解明を目的とした北島信子（2001、2002、2003）による一連の研究では、1950～70 年代の小学生による作文を分析し、彼らが大量消費社会のなかで「お金を使うことによる遊び」を肯定しながらも、親や友人の言動を参照して、そのような遊びを否定するようになるという認識の変化を捉えている。また、小林朋子・櫻田智子（2012）は、突発的な歴史的出来事といえる災害（ここでは地震）を経験した中学生の作文を分析し、被災直後の「不安」や「願い」、その後の「自身の成長」、これからの生活への抱負等「未来の自分」に考えが及ぶといった心理的変化を明らかにしている。

以上のように、教育学領域の研究において、作文は、子どもたちの自己・他者認識や歴史的出来事の経験を明らかにするうえで有用な資料となっている。しかし、属性ごとの分析や子どもたちの出来事経験をコンテクストのなかに位置づけて分析していないため、歴史的出来事が子どもたちに及ぼした影響を十分に精査できていない。

（2）ライフコース研究における一次資料

歴史的出来事が子どもたちの発達ならびに人生に及ぼした影響を解明するためには、多元的な時間枠組みから説明するライフコース・アプローチが有効である。

ライフコース研究では、回顧法の制約を避けるためにも（第 5 節参照)、逐次的なパネルデータの収集・分析が望まれる。古典的研究である Glen H. Elder, Jr. の『大恐慌の子どもたち』（1974 ＝ 1986）では、人間発達研究所のオークランド成長研究データを用いて、大恐慌と子どもたちの生活およびその後の人生経験を考察している。

ただし、成長過程の逐次的把握は難しく、大半の研究は回顧的データに基づいている。Tamara K. Hareven（1982 ＝ 2001）は、繊維産業と地域の衰退を経験した労働者子弟の職業移行を明らかにするため、企業記録のほかに面接調査による口述生活史を用いている。Hareven は、「面接から得られた生活史によって、記録資料だけでは容易にしえない、人間的な生々しい体験、人生についての意味付け、歴史的条件に接近でき」たとし、生活史の主観性がむしろ「当事者の意味付けについて知るための資料として用いられるならば」、「かえって強みとなる」と述べている（Hareven 1982 ＝ 2001: xxv)。この研究では作文こそ用いられていないが、対象者の主観的現実が表れている点で、作文も記述的な生活史として分析可能である。それは、森岡清美（1991）が青年たち（特攻隊員等、「決死の世代」）の遺書を分析し、彼らの生と死の間の意味づけや葛藤を解明した研究からも明らかである[2]。

以上のように、子どもたちの作文は、ライフコース研究における回顧法の補足資料として利用・分析

できる。ただし、先行研究がコーホートや地域単位で作文を分析しているように、時代・地域を越えてまとまった量の作文が存在する必要がある。この点において、炭鉱の子どもたちの作文は、各産炭地の小中学校で長期にわたり書かれており、優れたデータといえる。

(3)「炭鉱の子どもたち」の作文研究

近年、このような有用性から、炭鉱の子どもたちの作文に着目した研究が、社会学の領域で展開されている。新藤慶（2016）ならびに嶋﨑尚子（2016）は、尺別炭砿（北海道旧音別町、1970 年に閉山）地区にあった尺別炭砿中学校の全校生徒が閉山をテーマに書いた作文と転出後に書いた手紙を、教育社会学ならびにライフコース論の視点から分析している。そこでは、閉山と地域の急激な衰退（閉山から 1 年以内に全住民が転出）が、中学生に及ぼした影響を明らかにしている。具体的には、子どもたちは閉山を通して将来に対する不安を覚え、進路志望や社会認識を変化させた。そして、転出後の都市生活への適応にも不安を覚えるが、むしろ、それを克服しようとする姿勢がみられた。新藤は、これの性別や学年別の傾向を読み解き、1・2 年生が転校に伴う友人との別れを心配し、3 年生が進路選択に不安を覚える傾向を解明した。また、嶋﨑（2016）は、上記のような中学生の克服にむけた姿勢が、最も多感で進路選択を控えた「中学生という人生上のタイミング固有の特性であり強さ」（嶋﨑 2016: 45）であると説明している。

さらに、筆者は、炭鉱の事故を経験した子どもたちに関する研究を進めている（Kasahara 2017）。この研究では、1981 年に発災した北炭夕張新鉱（新鉱）のガス突出事故（93 名の犠牲者）をテーマにした中学生の作文を分析している。事故によって父親を亡くした中学生はもちろん、父親が無事だった中学生も事故によって進路変更や社会意識の変化を経験した。彼らは、この事故が炭鉱の閉山と地域の衰退を導き、彼らも進学や就職時に夕張から他出する将来を予期していた[3]。筆者は、こうした影響の要因としてタイミングを挙げると同時に、新鉱が石炭産業や地域、炭鉱労働者とその家族、もちろん中学生にとっても「期待の星」だったというコンテクストを挙げている（Kasahara 2017）。

このように、炭鉱の子どもたちの作文は、教育社会学やライフコース論の領域で照射されはじめ、児童期ならびに青年期における歴史的出来事の経験と適応が解明されはじめている。一方、作文資料が有する可能性は、社会学やライフコース論の領域にとどまらず、他領域にまたがる。そこで、次節以降では、実際に炭鉱の子どもたちの作文を引用しながら、作文資料の 3 つの可能性をみていく。

3.「炭鉱の子どもたち」の作文の可能性 1：短期的影響と動機づけの解明

本節では、作文資料が有する第一の可能性として、ライフコース研究への貢献について論じる。まずは、炭鉱の子どもたちの作文に見られる傾向について確認する。

(1)「炭鉱の子どもたち」の作文

現時点で筆者が収集している炭鉱の子どもたちの作文集は、表 1 のとおりである[4]。この一覧からわかるように、各時代・地域の子どもたちが、さまざまなテーマで多くの作文を執筆してきた。これらの文集は、産炭地の小中学校や教員、または自治体によって編纂され、保存されてきた。

作文のテーマはさまざまであるが、とりわけ、炭鉱でよくみられた労働運動（No.10-11、三池闘争、以下 No. は表 1 に対応）や事故（No.12-17）、閉山（No.18-30）に関する作文が豊富に存在する。なかでも、炭鉱の事故や閉山は、子どもたちにとって衝撃が大きかった。炭鉱地区にある小中学校では、子どもたちが事故や閉山をいかに経験したのかを記録するために、子どもたちに作文を書かせ、文集として残している（次項引用作文参照）。

一方、そうした大きな出来事だけでなく、平常時の生活に関する作文も多くみられる（No1-9）。炭鉱での生活は、炭鉱労働の特性[5]や産炭地の特性を反映して、独特な様相をみせた。それらは子どもたちの生活にも反映され、子どもたちが書いた生活文に表れている。特に、以下の作文のように、「お父さん」と題して書かれる作文には、変則的な時間（三交代制）で坑内の危険な仕事をする父親に対する率直な感想が表現されている（以下、誤字脱字含め、原文の表記をそのまま引用。括弧内は筆者加筆）。

私のおとうさんは、北炭（夕張）新炭鉱ではたらいています。私は、一番がたの時が一番い

表１　炭鉱の子どもたちの作文集一覧

No	文集名	テーマ	地域	執筆年	執筆学年	編者・発行所	資料形態	保存主体・提供者
1	『文集（日記集）』	生活	常磐	1962 年	小学生	（いわき市内小学校）	一次資料	個人（元教員）
2	『文集（生活文）』			1964 年	小学生	（いわき市内小学校）	一次資料	個人（元教員）
3	『あきやま』			1971 年	小学生	（いわき市内小学校）	一次資料	個人（元教員）
4	『いわき』			1960-71 年	小・中学生	石城地区国語教育研究会	刊行物	いわき市立図書館
5	『でか・ちび・のっぽ』		尺別	1966 年	小学生	音別町立尺別炭砿小学校	刊行物	古書店
6	『あこがれ（No１～18）』			1952-70 年	中学生	音別町立尺別炭砿中学校生徒会	一次資料	個人（元教員）
7	『しんこう（No１～19）』		夕張	1970-89 年	小学生	夕張市立清陵小学校	刊行物	ゆうばり歴史・教育資料室
8	『夕張山脈』			1957-03 年	小・中学生	生徒会連絡協議会学校生活・教育	刊行物	ゆうばり歴史・教育資料室
9	『せきたん』		三池	不明	小・中学生	大牟田市	刊行物	大牟田市立図書館
10	『三池の子ども』	労働運動	三池	1960 年	小・中・高校生	新読書社編集部	刊行物	古書店
11	『三池闘争と教育』			1973 年	小・中・高校生	古賀藤久（小学校教諭）	刊行物	古書店
12	『悲しみをのりこえ命を守るたたかいへ』	事故	三池	1963 年	小・高校生	総評・炭労・三池労組	刊行物	九州大学
13	『炭坑の子』		夕張	1968 年	小学生	夕張市立若菜小学校	刊行物	ゆうばり歴史・教育資料室
14	『炭鉱の子らの訴え』			不明	中学生	夕張市立千代田中学校	一次資料	道立図書館
15	『新鉱災害と私たち』			1982 年	中学生	夕張市立清水沢中学校	一次資料	ゆうばり歴史・教育資料室
16	『その日　父は帰らなかった』			1982 年	小・中学生	夕張新鉱災害作文集編集委員会	刊行物	ゆうばり歴史・教育資料室
17	『炭鉱っ子―悲しみをのりこえて―』			1985 年	小学生	夕張市立南部小学校	刊行物	個人（元教員）
18	『ヤマの子ら』	閉山	長崎	1960 年	小・中学生	ヤマの子ら編集委員会	刊行物	古書店
19	『小さな胸は燃えている』		筑豊	1961-66 年	小・中・高校生	芝竹夫（中学校教諭）	刊行物	古書店
20	『筑豊・池尻の子どもたち』			1956-71 年	中学生	村上通哉（中学校教諭）	刊行物	古書店
21	（尺別炭砿中学校作文集）		尺別	1970 年	中学生	尺別炭砿中学校閉山時教頭	一次資料	個人（元教員）
22	『ずり山は見ている』		古河好間	1968 年	小学生	いわき教師と文学の会	刊行物	いわき市立図書館
23	『わかれ道』		常磐	1971 年	小学生	湯本第二小閉山時教員	一次資料	個人（元教員）
24	『閉山』		大夕張	1973 年	中学生	夕張市立鹿島中学校	一次資料	ゆうばり歴史・教育資料室
25	『夕張っ子』		新鉱	1983 年	小・中学生	夕張市教育研究協議会国語部会	刊行物	ゆうばり歴史・教育資料室
26	『希望』		真谷地	1987 年	中学生	夕張市立緑陽中学校	一次資料	ゆうばり歴史・教育資料室
27	『高島のヤマの子らの叫び』		高島	1986 年	小・中学生	三菱高島炭砿労働組合	刊行物	古書店
28	『どうしてたんこうをつぶすんですか。』		（横断）	1986 年	小・中学生	「炭鉱の子どもの作文」編集員会	刊行物	古書店
29	『ヤマの子と母』			1990 年	小・中学生	日本炭鉱労働組合主婦連絡協議会	刊行物	古書店
30	『子ども日本風土記１　北海道』			1972 年	小・中学生	日本作文の会／北海道編集委員会	刊行物	古書店

いと思います。二番がたや三番がたになると、おとうさんがねぶそくをするからです。（中略）こうないの中は、とても、きけんだそうです。お父さんが、きかいにはさまったといって、手を見せてもらうと、手がはれて青くなっています。（中略）炭じんばくはつや、がすばくはつが、なければいいと心配です。おとうさんがおそいと、とても心配です。（No.7、小学3年女子）

このほか、作文のテーマは、炭鉱住宅（炭住）街での行事（山神祭や盆踊りなど）や「炭鉱の学校」（炭鉱町にある小中学校）に関する作文など多岐にわたる。そこには、子どもたちから見た炭鉱社会の特性、すなわち、職住近接、共同的精神（「一山一家」など）、階層社会（父親の職位：職員・鉱員・組夫など）といった側面が描かれている。

これらの作文は、単なる時系列的な記述にとどまらず、子どもたちの感想を含めながら当時の状況を詳細かつ表現豊かに記述している。そして、上記の作文のように、作文のなかに家族や友人がしばしば登場し、炭住街での共同生活や有事の際に助け合う「一山一家」の様子が描かれている。

そして、これらの作文は、各地域で長期にわたり執筆・保存されてきた。国内の石炭産業は、戦後から1950年代前半にかけて好況期をむかえ、全国に900以上の炭鉱と約20万人の炭鉱労働者を数えた基幹産業であった。9次にわたる石炭政策下で、およそ半世紀をかけて収束していった。その間、各産炭地の子どもたちは、上記のようなさまざまなテーマの作文を執筆してきた。

炭鉱の子どもたちの作文は、各時代・地域ごとに傾向が異なる。たとえば、同じ「閉山」に関する作文であっても、1950年代後半～60年代の筑豊を中心とした作文では、主に炭鉱の合理化や閉山によって子どもたちが貧困に陥る様子が描かれている（No.18-20）。また、1970年代の北海道内産炭地の作文では、閉山後の急激な地域の崩壊と、大都市圏への転出に対する不安等が書かれている（No.21, 24, 30）。そして、1980年代以降の作文では、石炭産業や地域の先行きに対する子どもたちの危機感が表現され、彼ら自身や家族の将来に対する不安が表れている（No.25-8）。このように、炭鉱の子どもたちの作文は、石炭産業の転換段階ごとに、各産炭地で書かれ、まとまった量が保存されている。

（2）作文資料の可能性１：事故・閉山による短期的影響と動機づけの解明

以上のような炭鉱の子どもたちの作文は、時代、地域、タイミングに着目した研究を可能にする点で、ライフコース研究に大きな貢献をもたらす。最も期待される貢献としては、炭鉱の事故や閉山という歴史的出来事が子どもたちに及ぼした短期的影響（意識の変容や進路変更）や出来事に対する状況理解、動機づけの解明である。とりわけ、青年前期にある中学生は、多くの発達課題を抱えているため（John A. Clausen 1986 ＝ 2000）、歴史的出来事による影響を受けやすい。そして、彼らは、多感な時期にあり、文章能力を身につけているため、作文に自身の経験や感情、家族や友人の様子を詳細に記述する。したがって彼らの作文は、歴史的出来事に遭遇した子どもたちの意識変容や動機づけを解明するうえで貴重な資料である。以下では、炭鉱の事故と閉山に関する中学生の作文を例に、彼らの意識変容と動機づけを検討する。

①炭鉱の事故と中学生

炭鉱の事故は、子どもたちにとって突発的な予期せぬ出来事であり、衝撃が大きかった。まして、進路選択を前に父親を失った中学生は、将来に対する大きな不安を抱えた。1981年に発生した北炭夕張新鉱のガス突出事故で父親を亡くした中学生は、事故を思い出しながら、以下のような作文を執筆した。

（昭和）56年10月16日、「まさか」とは思っていたけど…。私の父も、この災害にあった一人です。私は、全々信じられなかったです。これからどうやって食べて、どうやって生きていけばいいのかと、つくづく思いました。でも私には何もできません。今、まだ坑内に残されている人達、その家族。私にはこの人達の気持ちがよくわかります。（中略）私の父も今まで一生懸命働いた“かい”が全部消えてしまいました。それを思うと、くやしくて、くやしくて、でも何を言っても父は帰ってはきません。だからもうくよくよしないで。今ではもう、楽しく友達と話をしたり、でもその話の途中で友達がお父さんのことを話す時は、お父さんを大切にしてあげてネ（ママ）といってあげます。やっぱり、人間はいつ死ぬかはわからないのだから一日一日

を大切にして生きていきたいです。そして一歩一歩と大人になっていきます。つらいこと、苦しいことはたくさん、たくさんあると思います。それをのりこえて生きていこうと思います。（No.15、中学2年女子）

この作文からは、将来に対する不安に加え、事故当日から作文執筆までの4カ月間におよぶ試行錯誤や葛藤の経緯がみられる。作者は事故当時、父親の死を信じられなかったと同時に、「これからどうやって食べて」「生きていけばいいのか」と将来に対する大きな不安を覚え、父親の無念にまで言及してくやしがる。一方、4カ月経ってもなお坑内に残されている人たちとその家族のつらい思いに言及し、自身の悲しみや辛さを相対化している。さらに、前向きになるために「楽しく友達と話を」して、父親が戻ってこない現状を受けとめようとしている。そして、これから非常に多くの困難が待ち構えていると予想し、それらを乗り越えていく決意を表明している。

このように、炭鉱の事故で父親を亡くした中学生は、悲しみや将来に対する不安だけでなく、状況を理解しようと試行錯誤するなかで葛藤や苦しみを覚えていた。そして、亡くなった父親や周囲の他者を参照して、困難を乗り越えようとしていた。

②炭鉱の閉山と中学生

同じく、炭鉱の閉山も子どもたちにとって予期せぬ出来事であり、衝撃が大きかった。無論、閉山を直接経験するのは炭鉱労働者である父親であり、子どもたちは家族を介して間接的に経験するに過ぎない。しかし、父親の失業と再就職に伴う地域移動・社会移動は、子どもたちに転校や友人との別れ、新天地での適応を強制した。閉山から転校までに書かれた作文から、その間の葛藤や状況理解、動機づけがみられる。

前述の尺別炭砿の閉山は、高校受験を目前に控えた中学3年生にとって、あまりに衝撃が大きかった。以下の作文のように、中学生は、閉山を機に家族や社会に対する考えを新たにした。

閉山という言葉は、つい最近というか、今でもあまり実感がわかないのだが、なにやら、非常にさびしいような感がこみ上げてくる。よりによってなんで自分達が3年の時、それに、高校受験の時にあたるなんて、世界中で一番自分が不幸じゃないか、なんて思ったことがしばしばあった。自分は、家がどこへ行くのか、どんなことをするのかが心配していたつもりだったが、これがまた反対に親が自分のことを、より以上に、気をつかってくれていたのだ、と知った時には、さすがのおれも心にガツンとくるものがあった。ひまさえあれば、おふくろは「高校だけは、入ってちょうだい。」と耳にたこができるくらい言われた。時々思うのだが、高校へ入るのは、自分が勉強したいためなのか、もしくわ(ママ)親こうこうのつもりで受験したのか、うなることがある。『閉山』というものは、人の人生を大きく変えてしまった。今の日本、いや！？日本だけではないかもしれないが、古きをすてて、新しきを作る主義に適しているのじゃないかっ！？今書いたことは、自分が思っていることの、何十分のいくつにしかすぎない。中学3年になって初めて、実感をして、わかったことだが、もっと一生懸命に勉強をやっておけば、今わらってくらせたのにと思う。まちがって高校に入れたら、心期一転、心を入れかえて、青にさいにならぬよう勉強にはげもうと思う。終り（No.21、中学3年男子）

この作文からは、閉山に困惑し、反感を覚えながらも、家族や社会、そして、自分自身に対する考えを新たにしている様子がわかる。作者は、高校受験の直前に閉山をむかえ、家族がどうなるかわらない状況で、「世界中で一番自分が不幸じゃないか」と思っていた。しかし、閉山で困惑しているはずの母親が、息子の高校進学を期待するなど、自分が親を心配していた以上に気をつかっていたことを知り、感動した。高校進学は自分のためなのか親のためなのか悩むが、閉山を機に考えた日本社会についてきちんと説明するためにも、高校入学後は勉強に励む決意を表明している。

このように、炭鉱の閉山は、とりわけ進路選択を控えた中学生に多大な影響を及ぼした。それは進路変更という目に見える影響だけでなく、志向性の変化といった内面的な影響もみられる。そうした変化は、家族や友人といった重要な他者の言動を参照することで生じていた。

（3）作文資料の制約と補完方法

以上のように、炭鉱の事故や閉山に関する作文には、当時の子どもたちがいかに状況を理解し、動機づけしたのかが書かれている。これらは、ライフコース研究における重要な分析資料であるが、ここでいくつかの制約について検討しなければならない。

第一の制約は、作文の結論部分が肯定的な意思表明になりがちであるという点である。とりわけ、事故や閉山に関する作文の多くは、全国からの激励に対する返信を意図して書かれ[6]、将来に対する前向きな結論になる傾向がある。したがって、分析の際は、結論だけをみるのではなく、むしろ、その「肯定的な」意思表明にいたる文脈をみる必要がある。

第二の制約は、作文内容に影響を及ぼす諸要因、たとえば、作文執筆の経緯や目的、文集の編纂主体（教員、教育委員会、保護者、まれに生徒会等）、それまでの作文指導や学校文化等が必ずしも明確でないという点である。文集のまえがき等にこれらの記述がない限り、執筆から時間が経つほど把握が困難である。これについては、先行研究でも行われているように、元教員に対するインタビューや学校記念誌等、文書資料の分析が有効である[7]。

そして、これらの制約を最小限にするためにも、学校文集（単一学校の児童・生徒全員分の作文が掲載されている文集）の分析が望ましい。学校文集は、学校内における作文指導や学校文化、編集意図といった外的影響を統制できる利点がある。また、市内文集等の優秀作文集とは異なり、全校生徒の作文が掲載されているため、事故や閉山が当時の子どもたち全体に及ぼした影響を把握できる。

このようにして、作文資料の制約を最小限にし、炭鉱の事故や閉山が子どもたちに及ぼした短期的影響や動機づけを精査できる。そのうえで、コーホート間、地域間比較を通して相対化し、ライフコース研究に対する大きな貢献が可能となる。

4.「炭鉱の子どもたち」の作文の可能性２：地域史の再編

前節では、ライフコース論の視点から、作文資料の第一の可能性を確認した。本節で確認する第二の可能性は、炭鉱の子どもたちの作文が、地域史の再編に寄与するという点である。炭鉱の子どもたちの作文には、大人たちの視点では描かれなかった炭鉱の社会、すなわち、個々の家庭や学校、地域が描かれている。とりわけ、児童期にある小学生は、社会的配慮が未成熟であるため、学校や家庭で生じた出来事や人間関係を見たままに表しており、当時の炭鉱社会を知るうえで重要な資料である。以下では、小学生が書いた炭鉱での生活ならびに事故に関する作文を例に、炭鉱社会の実態をみていく。

（1）小学生が見た炭鉱での生活

前節で確認したように、作文のテーマは、平常時の生活から事故や閉山まで、多岐にわたる。そのなかでも、子どもの視点から炭鉱社会の実態に迫るという意味では、平常時の生活に関する作文が最も価値があるといえる。なぜなら、家庭内のごく普通の会話や家事、または喧嘩といった内容は、外部からわかりにくいうえ、子どもたちの親からも口外されないからである。以下の作文は、常磐炭礦地区の小学生が母親をテーマに書いた作文である。この作者の母親は、主に二番方で「近くのずり山の下で、炭を運んだりして働いている」。

> *私は母が、ずっと一番方ならいいなあと思う。と言うのは、宿題がいっぱいある時などは家に帰って、ご飯たき、茶わん洗い、その上、そろばんもあるからだ。宿題が少ない時などはいいけど、多いとそろばんが終ってからでないとできない。*
>
> *父が酒を飲むと、決まって、母にも飲ませる。母は、少し飲んでも顔が赤くなる。それに、決まってテレビで覚えた歌を歌い出す。歌い終わると、「おかあさんの声きれいだが。」と聞くこともある。私は、酒を飲んだ時の母を好きでない。それであまりいい返事をしない。*（以下略、No.2、小学６年女子、会話文の方言は原文のまま表記）

この後のパートでは、作者の兄がやるはずの家事（布団を敷くこと等）を母が作者に「『やってやりな』」と命令した例を引き合いに、「自分の考えをおしつける」ようなときは、「きまって母がきらいになる」と締めくくっている。

この作文からは、炭鉱の家庭における家事分担とそれに対する子どもたちの見方や感想がわかる。この家庭では、母親が二番方で遅くまで働くときがあり、子どもたちは炊飯や食器洗い等の家事を分担し

ていた。炭鉱労働の三交代制によって子どもたちの家事分担も異なり、二番方の時に最も負担が大きかった様子がわかる。作文の随所でみられるように、この作者は炭鉱で働く母親と家事分担に不満や否定的な感情を抱いていた。

また、家庭での教育環境、学習事情がわかる作文も多くみられる。以下の作文は、常磐炭礦地区の小学生による作文である。作者は、クラス内で成績順に分類される「C クラス」（最下位クラス）から上がるために、勉強しようとするが、テスト前日になってもやる気が出ず「早めに終わってテレビの前に」行ってしまう。

> *母は決まって「勉強やったのか」という。私は「うん、やった」と答える。だがやっていない所もたくさんある。テストの日になって、きのういっしょうけんめいやればよかった、といつも後かいする。（中略）いつになってもCクラスからあがることができない。家に帰って、母にテストのことを話すと、母は「Cクラスの一番けつだっぺ」といい、「そんじゃ、高校になんてあがらんにど。いまは、高校にあがってねどいいどこでも働かんにぇんだがんな」と言われた。そういわれてみると、私はいやいやながらまた6畳へもどる。（中略）母は、私が、勉強をおわって、テレビを見にいくと、いつも「おわったのか」といって、すぐに「いまは高校にあがんねど」とか、「勉強しね人は」などと、いつも同じことを言う。私は、それをいわれると、テレビを楽しく見れない。*（No.2、小学6年女子、会話文の方言は原文のまま表記）

この作文から炭鉱の子どもたちの勉強スタイルがわかるだけでなく、炭鉱労働者世帯における親から子に対する進学期待がわかる。高校進学率が上昇していた当時、母親は、高校進学が優良な職業に就くための必要条件であるという認識を持ち、日ごろから子どもに勉強するよう厳しく指導していた。一般的に、炭鉱の家庭では父母の学歴が低いため、子どもの教育に対する理解や期待がないといわれるが[8]、むしろここでは高校への進学を後押ししていることがわかる。

以上のように、炭鉱の生活に関する作文は、通常、表に出ることのない家庭でのやり取りを表し、炭鉱労働者の家族がどのような生活を営んでいたのかを把握できる貴重な資料である。もちろん、子どもたちが作文執筆の過程で脚色している部分があるかもしれないが、元教員へのインタビュー等、他の資料と合わせることで信憑性が保たれる[9]。

（2）小学生が見た炭鉱の事故

小学生が書いた事故に関する作文は、前節で挙げた中学生の作文に比べて事実の時系列的な記述が多い。しかし、そこには子ども自身が目にした光景が詳細に記録されており、当時の状況を知るには非常に有用な資料である。以下では、前節と同じく北炭夕張新鉱のガス突出事故を事例にみていく。

以下の作文は、事故が起きたとき父親がちょうど坑内で働いていたという小学4年生の作文である。作者は、友だちと遊んでいたときに救急車の音を聞いて異変に気付き、上級生の話で事故を知る。父が出てくるのを待とうと電車で坑口に向かおうとしたが、「電車の番をしているおじさんに」「『子どもは、だめだ』」と断られた。その後、友人とその友人の親戚と一緒に坑口に向かうと、「死んだ人がつぎつぎとたんかではこばれ」、救急車で運ばれていた。「お父さんは、だいじょうぶかなと心配」していると、先に坑口に来ていた母親がいたので「お父さんは、まだ新鉱から出てこないの」と聞いた。

> *するとお母さんは、「まだ。」と言いました。ぼくは、びくっとしました。そこにはみんなのお母さんが、新鉱の中で働いているのか、死んでいるのかを心配していました。少したつと、坑内にいる人たちの名前が発表されました。みんながワアワアと言ってうるさかったので、聞こえません。ぼくの知っているお母さんの友だちが、「もう一回、言って」と、大声で言いました。もう一回言っても、ぼくのお父さんの名前はよばれませんでした。お母さんはなきました。だから、ぼくは、こう言いました。「まだ、死んだってわかんないから、なくな。」と。二回目の発表がありました。ぼくのお父さんの名前がよばれました。ぼくは、心の中でバンザイとさけびました。お母さんはなみだをふきながら、よかった、よかったと喜びました。（中略）お父さんは、まっ黒い顔をして、びっくりした様子で、エレベーターからおりてきました。そ*

して、みんなに拍手でむかえられました。とちゅう、タバコ、タバコと言って、よそのおじさんにもらって、おいしそうにすっていました。お友だちにりんごをもらって、ロッカーの前で、おいしい、おいしいと言って、食べていた顔がなんとも言えませんでした。食べ終わると、死んだ人たちのロッカーを見て、なみだぐんでいました。（中略）帰るとき、○○先生がそばにきて、「よかったな。」と、なみだぐんで言いました。ぼくはとてもうれしかった。
（No.16、小学４年男子、一部固有名詞を加工）

この作文では、父を待っている間と父の無事を確認したあとの様子が描かれ、人びとの緊張感が伝わってくる。たとえば、大人同伴でなければ坑口に行けなかった様子や息子の質問に対して言葉少なに返す母親の様子は、当時の異常事態を物語っている。また、父の無事がわかったときに「心の中でバンザイとさけびました」とあるように、坑口付近では未だ無事が確認されない人も多く、喜びをあらわにできなかった状況がわかる。そして、昇坑したあとの父の様子から、無事だった炭鉱労働者が自身の無事をかみしめながらも、同僚の死に深く悲しんでいた様子が読み取れる。最後に、先生が声をかけてくれたという記述から、当時、教員も坑口に駆けつけ、教え子とともに父兄の無事を祈っていた様子がわかる。

このように、子どもたちの作文から、事故当時の町や坑口付近で、多くの人びとのさまざまな感情が錯綜していた様子が読み取れる。このほかの作文では、帰宅後、「お父さんとお母さんは『こんなことならへい山するかも知れないなあ。』といっていました」（No.16、小学４年男子）と記しており、父母たちが事故から閉山を連想していた様子がわかる。子どもたちの作文は、事故が家族や地域に及ぼした影響をみるうえでも有用な資料といえる。

以上のように、子どもたちの作文は、大人たちとは異なる視点から炭鉱の生活や事故を描いており、既存の地域史を捉え直す際に利用できる資料である。

5.「炭鉱の子どもたち」の作文の可能性３：観測時点効果の抑制

最後に挙げる３つ目の可能性は、質的調査の方法論における可能性である。生活史を回顧的に聴き取る際の最大の制約として、観測時点効果、すなわち、調査時点の対象者自身の状況が回答内容に反映され、事実の書き換えや脚色が起きるといった制約がある。炭鉱の子どもたちの作文は、こうした制約を最小限にとどめ、さらには忘却していたさまざまな事実を想起させる可能性を有している。以下では、実際に筆者が参加した炭鉱の子どもたちに対する生活史聴き取り調査を例に、この可能性についてみていく。

（1）回顧法との併用実践：過去の出来事を想起するきっかけとしての作文

①尺別炭砿閉山時中学生への生活史インタビュー調査の概要

2016年８月に、産炭地研究会（JAFCOF）尺別チームは、尺別炭砿中学校の追跡調査（生活史インタビュー）を行った。閉山からすでに46年が経ち、当時在学生だった２人の対象者（Sさん［男性］、Kさん［女性］）は、すでに還暦をむかえていた。この２人は在学時に閉山に関する作文を執筆しており、その作文は当時の教頭先生によって保存されていた。筆者らは、教頭先生から作文を拝借し、複写した作文をこのインタビューに持参した。

はじめは作文を開示せず、２人並行して在学当時の話をうかがっていた。しかし、46年も前の話を想起するのは難しいように見え、ましてや閉山に対する認識や当時の社会意識等は想起しづらい様子だった。そこで、筆者らは作文資料の概要と、筆者らが作文を所持している経緯を説明し、２人の作文を本人たちそれぞれに開示した。

２人とも作文執筆の事実を忘れており、「俺、書いた覚えないけどなぁ～。いつ書いたんだべ」（Sさん）、「みんなに書かせたのかな」（Kさん）というように、やや疑うように作文を読み始めた。しかし、２人は作文を読んでいくうちに、中学時代の自分が閉山の時に何を考えていたのかを知ろうと熟読し始め、時おり声を出して読む場面もあった。そして、その作文の内容をきっかけに、２人とも当時の状況を想起し始めた。

②作文内容の想起と他の出来事の連想

Sさんは、作文のなかで、尺別炭砿の閉山は、「エネルギー革命のためだと思う」と解釈し、母校を去らなければならない時間が刻一刻と近づいている状

況に対して「なんともいえない気持ちだと思」っていた。そして、最後に「1970年は色々な年だ。6月にひかえている安保のほか色々ある。私にとってもだいじな年だ」と締めくくっている。Sさんはこの作文を読んだうえで、以下のように述べている。

> *そういえば、高校に行ったとき、デモに出たもんな。中学生でそんなこと書いて、実際にデモに出るんだからな。○○大学の隣りの高校だったから、その絡みでデモに出たんだよ。ハハハッ、恥ずかしいなぁ。恥ずかしいというより、面白い。70年安保のこと書いてる。*（2016年インタビューより、一部固有名詞を加工）

Sさんは、中学時代に社会意識を強く持っていたと振り返り、高校時代のデモ活動についても思い出した。そして、「中学生でそんなこと書いて、実際にデモに出るんだからな」と中学時代と高校時代を連続的に捉えていた。また、われわれがその直後に、「他の生徒も含めて、政治的内容について書いている人が多かった」と指摘すると、Sさんは「当時、炭鉱の閉山に関しては、生徒はみんなすごい反感を持っていた」と補足した。Sさんは、作文を読んだことをきっかけに、中学・高校時代や当時の学校の様子を想起した。

一方、Kさんも自身の作文から当時を思い出していた。「家では父さんが一番悩んでいる。母さんは1か月前から、実家からの急用の電報で帰ったきり」という作文を読み、「（母が）帰ったって書いてあるから、そうなんだよね」と忘れていた当時を思い出している。さらに、Kさんは、作文執筆後に知り得た事実を補足した。作文では「家では、父さんが一番悩んでいる」、「これから、どこへ働きに行くか困っている」と書いてあったが、父を困らせていたのは失業と再就職だけでなく、炭鉱からもらうはずの退職金が「有給をもらって休んだ日」の影響で「2分の1になっちゃった」ことを挙げている。このように、作文の開示は、対象者に当時の状況を思い出させるだけでなく、作文内容の信憑性を確保するうえでも有効である。

（2）課題とさらなる可能性

以上のように、昨年実施した調査では、作文の開示が観測時点効果を抑制し、対象者の想起を促したという点で有効に働いた。しかし、この方法にはいくつかの研究倫理上の課題があることも確認しなければならない。

第一に、作文開示に関する課題である。まず、作文の提供者に作文開示の了解を得なければならない。上記の調査では、作文提供時点で、提供者である元教頭に、「作文を研究目的で執筆者本人に開示する」同意を得て、なおかつ「執筆者以外に開示しない」約束をした。そして、作文を開示する際、全体にではなく、本人だけに開示した。本人以外に開示する場合は、本人の同意を得なければならない。今回の調査では、本人が自身の作文を朗読し始めた時点で、全体への開示について同意を得たと判断した。

第二に、分析方法と個人情報に関する課題である。作文と口述生活史を結びつけた分析によって、対象者のライフコース全体が明らかになるが、その分、個人が特定されやすくなる。したがって、個人情報保護の観点から、同意なく2時点のデータを連結して分析し、その結果を公開してはならない。この点も、対象者に「個人が特定されないように加工したうえで、利用・公開する」という確約を得る必要がある。

以上のように、この調査を研究倫理上問題なく実施するためには、作文資料の提供者と執筆者（インタビュー対象者）に、段階ごとに同意を得る必要がある。また、いずれかの段階で同意を得られず、作文の所持自体否定された場合、その作文をデータセットから削除しなければならない。

もちろん、これら以外にも検討すべき点は多々あるだろう。そもそも、誰かに読まれると想定されていなかった作文を保存し、読むこと自体、研究倫理上の問題があるといえる。しかし、本論で明らかにしたように、作文資料は多くの学術的可能性を有した資料であり、回顧法との併用によってその効用を最大化できる。したがって、研究者は、作文提供者と執筆者（インタビュー対象者）双方に十分な説明をして、作文の利用と回顧法との併用に関する理解と同意を得なければならない。

6. まとめ

（1）本論のまとめ

本論では、「炭鉱の子どもたち」の作文が有する3つの可能性を指摘した。1つ目は、ライフコース

研究における可能性である。青年前期の多感な中学生は、事故や閉山といった歴史的出来事によって多大な影響を受けながらも、重要な他者を参照しながら状況を理解し、新たな生活に向かう動機づけを行っていた。そうした詳細な相互作用のプロセスや主観的現実は、子どもたちの作文に描かれており、文脈の解読によって把握が可能となる。事故や閉山当時の子どもたち全体にアプローチできるという点においても、作文は貴重な資料である。

2つ目は、地域史再編に関する可能性である。社会的配慮が未成熟な小学生が書いた作文には、家庭生活や学校生活、事故等の出来事に関する詳細な内容が描かれている。それらは時系列的な描写が多いが、大人たちの視点では描かれないような家族や地域の様子が率直に描かれている。当時の実態を知り、既存の地域史を捉え直すうえで非常に重要な資料である。

そして、3つ目は、質的調査の方法論への可能性である。回顧法と作文資料の併用によって、観測時点効果を抑制できる。さらに、忘却していた事実を想起させたり、その後の人生経験を連想させる点で、生活史を聴き取るうえで大きな可能性を有した資料である。

以上のように、炭鉱の子どもたちの作文は、炭鉱の人びとのライフコースや産炭地の歴史を捉えるうえで重要な資料である。もちろん、逐次的データが最良ではあるが、炭鉱の子どもたちの作文は、補完的な資料であると同時に、子どもの視点という新たな側面を加える点で固有の資料的価値を有している。

一方、本論の課題は、①他産業の子どもたちの作文との相対化が不足している点、②作文の分析方法を十分に検討できなかった点である。今後、前者については、全国的な作文教育、とりわけ、生活綴方教育の系譜と照合していき、後者については、作文の文脈に着目した量的分析の方法を検討していきたい。

(2) 作文アーカイビングの現状と課題

それでは、このように貴重な作文資料は、現在、どのように保存・活用されているのだろうか。作文アーカイビングの現状と課題を見て本論を終えたい。

作文の保存形態は、大きく分けて個人的保存と公的保存に分かれる。個人的保存とは、教員や卒業生による自宅等での保存を指し、ほとんどの学校文集（一次資料）は、この形態で保存されている。一方、公的保存とは、公的機関による公的施設（図書館や博物館など）での保存を指す。

本論で何度も取り上げた尺別炭砿中学校生徒の作文は、閉山ならびに閉校当時（1970年）の教頭が40年以上、自宅で保存してきたものである。しかし、これまでの転勤や転居でいくつかの作文を廃棄せざるを得ず、また、原資料（原稿用紙）のまま保存しているため、経年劣化が進行している。そして、これまで資料の提供先が不明だったため、誰にも公開せず、活用されずにいた。このように、個人的保存は、公的には保存・公開できないような未刊行の個人資料を長期にわたり保存できるという利点がある一方、①資料の経年劣化に対応できない点、②転居あるいは保存主体の他界等で資料が廃棄されやすい点、③公開・提供方法がわからず資料の存在自体が埋没してしまう点の3点が課題である。

また、公的保存では、各学校の図書室や公立図書館等で保存されるケースが多いが、産炭地では学校の統廃合や財政の悪化が進み、十分に保存されているとは言い難い。そうしたなか、夕張市[10]の「ゆうばり歴史・教育資料室」[11]では、学校文集や学校記念誌等の資料が保存されている。この資料室の特長として、①各学校史と市教育史双方の資料が保存されている点、②教育委員会の管理のもと研究目的での利用が可能な点を挙げることができる。一方、①原資料の経年劣化に対する修復やデータベース化が進んでいない点、②市民や研究者の認知度が低く、利用者が少ない点が課題として挙げられる。

以上のように、一次資料としての作文アーカイビングは、個人・公的保存ともに多くの課題を抱えている。共通する課題として、保存にかかるコストやスペースの問題、個人情報保護の問題がみられるが、最大の課題は、作文資料の価値が認識されていない点にある。本論で明らかにしたように、炭鉱の子どもたちの作文資料には、学術的な価値が多分にあり、より一層の作文アーカイビングが求められる。そのために、保存主体である個人と公的機関、研究者等の利用者の間で作文資料の価値を確認し合い、作文アーカイビングにむけて協働しなければならない。石炭産業の収束から久しい今日において、早急な対応が求められている。

付記

本論は、早稲田大学総合人文科学研究センター「知の蓄積と活用にむけた方法論的研究」部門第9回研究会（2016年12月1日開催：早稲田大学大学院社会学院生研究会との共催）報告にもとづくものである。

注

⑴　作文評価法の開発、作文を資料とする言語発達の研究、作文作成過程の考察、および作文内容分析・批判研究においていくつかみられる程度である（滝波1996）。

⑵　森岡（1991）は、遺書を「一種の個人的記録」とし、信頼性や完璧性、代表性において弱みがあるものの、「記者にとっての意味のある社会関係、つまり彼の行動や価値観を左右する社会関係を露呈させ、彼を一定の行動に駆り立てる動機、内的な闘いなどをあらわにする」点が強みとしている（森岡1991: 19）。

⑶　作文執筆から半年後、新鉱は閉山し、多くの中学生が夕張から離れていった。作文に書かれた内容が現実のものとなった。

⑷　2017年5月現在、筆者ならびに早稲田大学文学部嶋﨑尚子研究室で収集した分を示しており、このほかにも多くの文集があることを確認している。

⑸　炭鉱労働の特性に関して、嶋﨑（2017）は、①作業・業務の多様性、②就労形態（三交代制）、③生活形態（職住近接、仲間意識）を挙げている。

⑹　たとえば、表1 No.16『その日父は帰らなかった』（新鉱ガス突出事故）やNo.17『炭鉱っ子―悲しみをのりこえて―』（南大夕張ガス爆発事故）では励ましへの返事を意図した作文がみられる。また、閉山や炭鉱不況に関するNo.18『ヤマの子ら』では、「黒い羽根運動」に対する感謝の気持ちを書いた作文が多くみられる。

⑺　尺別炭砿中学校生徒の作文を分析した新藤（2016）は、作文に「社会に対する問題意識の高さ」が見られる背景を特定するため、当時の教員に対するインタビューを行っている。その結果、この学校では「『平和を守り真実を貫く教育の確立』を教育目標の基本に掲げる」校風があり、「その反映としての教師集団や生徒会活動・学級会活動のあり方などの総体によって、社会に対する問題意識が作文にみられたとしている（新藤2016: 8）。

⑻　こうした見方は、高学歴化進展前の炭鉱不況期の子どもたち、あるいは転校を繰り返す組夫の子どもたちを念頭に置いている。たとえば、福岡県教職員組合の各レポートでは、教員たちの手記をもとに、父兄の教育理解のなさ、家庭教育環境の劣悪さを訴えている（たとえば、福岡県教職員組合1965など）。

⑼　この文集を保管していた当時の教員にインタビューした結果、作文内容と同じく、父兄の教育期待がみられたという。特に、鉱員の父親は、「子どもには炭鉱で働かせたくない」ため、教員に対して期待していたという（2016年、元教員インタビューより）。

⑽　国内有数の産炭地である夕張市には、炭鉱が盛んだったころ、小学校は22校、中学校は9校あったが（1974年まで）、炭鉱の衰退とともに減少し、2011年以降、小中学校1校ずつとなっている（北海道1959-2016）。

⑾　夕張市教育委員会と地元の有識者らは、各学校史と市の教育史を継承するため、中学校の一室を借りて学校ごとに配架した（2016年、元教員インタビューより）。管理は市教委が行い、研究目的に限り利用を認めている。

参考文献

Glen H. Elder, Jr., 1974, *Children of the Great Depression: Social Change in Life Experience*, The University of Chicago.（＝1986, 本田時雄・川浦康至・池田政子・伊藤祐子・田代俊子訳,『大恐慌の子どもたち 社会変動と人間発達』明石書店）.

北海道, 1959-2016,『北海道統計書』.

福岡県教職員組合, 1965,『産炭地教育白書第二集 産炭地の教師は訴える』日本教職員組合・福岡県教職員組合.

John A.Clausen, 1986, *The Life Course: A Sociological Perspective*, Prentice Hall.（＝佐藤慶幸・小島茂訳, 2000,『ライフコースの社会学』早稲田大学出版部）.

Kasahara, R. 2017, "Children's Experiences of the Coal Mine Disaster: Analysis of Junior High School Students' Essays in Yubari City", *Mineral Exploitation and Sustainability*, 2: 253-8.

北島信子, 2001,「戦後生活綴方教育における子どもの生活の意識化― 1950年代・戸田唯巳『学級というなかま』を中心に―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』48(1): 37-45.

――――, 2002,「恵那の生活綴方教育における子どもの生活の意識化― 1970年代・消費文化への抵抗という観点を中心に―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』48(2): 95-105.

――――, 2003,「恵那の生活綴方教育の再評価― 1970年代・二つの実践における作品の分析を通して―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』49(2): 93-103.

小林朋子・櫻田智子, 2012,「災害を体験した中学生の心理的変化――中越大震災1ヶ月後の作文の質的分析より――」教育心理学研究 60: 430-442.

森岡清美, 1991,『決死の世代と遺書―太平洋戦争末期の若者の生と死―』吉川弘文館.

守屋慶子・森万岐子・平崎慶明・坂上典子, 1972,「児童の自己認識の発達――児童の作文の分析を通して」『教育心理学研究』20(4): 205-215.

嶋﨑尚子, 2016,「『尺別炭砿の閉山と子どもたち』から学ぶこと」嶋﨑尚子・笠原良太編,「尺別炭砿の閉山と子どもたち――元尺別炭砿中学校教頭松実寛氏による講演の記録」『JAFCOF釧路研究会リサーチ・ペーパー』vol.7.

――――, 2017,「炭鉱閉山と労働者・家族のライフコース――産業時間による説明の試み」岩上真珠・池岡義孝・大久保孝治編『変容する社会と社会学―家族・ライフコース・地域社会』学文社.

新藤慶, 2016,「炭鉱閉山がもたらす子どもの生活と意識の変容―尺別炭砿閉山前後の中学生の作文・手紙を通じて―」『JAFCOF釧路研究会リサーチ・ペーパー』vol.9.

滝波章弘, 1996,「作文に表現される子どもの世界――旅行世界と日常世界の違い」『人文地理』48(5): 60-76.

Tamara K. Hareven, 1982, *Family Time and Industrial Time*,

Cambridge University Press.（＝ 2001，正岡寛司監訳，『家族時間と産業時間』早稲田大学出版部）.
山本真子・小松孝至，2016，「児童の日記にあらわれる他者との関係の中の自己」『教育心理学研究』64（1）: 76-87.
夕張新鉱災害作文集編集委員会編，1982，『その日父は帰らなかった』夕張新鉱災害作文集編集委員会編.